

少年少女のための

4

現代日本文学全集



規子 子虚 岡濱 正高 集

責任編輯

久伊福

松藤田

潜清

一整人

NDC 918.6

少年少女のための

現代日本文学全集 4

正岡
高浜
子規
集

定価 二五〇円

昭和三十一年一月二十八日 初版発行

昭和三十三年八月 十日 再版発行

発行者 小嶺嘉太郎

発行所 千代田区神田神保町二ノ二一

発行所 東西文明社

中興堂
製本所
石毛製本所

この本を読む人に

すぐれた文学者は、この世や人間の、真実や美をするどくみつめて、その作品にはつきりとえがいてくれています。私たちは、それを読むことによって、私たちの心をゆたかに、美しくすることが出来ます。

この本には、そうしたすぐれた作家たちの代表的な作品のなかから、さらに少年少女のみなさんが、読むのにふさわしいもの、ぜひ読んでもらいたいものを、えらんでのせてあります。そして学校で教わらないむずかしい漢字は、かなに改めたり、その意味をしるしたり、またかなづかいも、現代かなづかいになおして、みなさんにしたしみやすいようにしてあります。

その作品も作家のいろいろな面を示すようにしてありますが、あまりに長すぎて、この本にのせきれない作品や、もっとおとなになってから読んだほうがいい部分をふくむものは、その一部をとってのせてあるものもあります。その部分のとりかたもくふうして、その作品のあらましを知られるようにつとめました。

しかし、もちろん原作をこのように改めたといっても、原作の意図およびそ

の味わいなどは、できるかぎり、そこなうことなく伝えることができるよう苦心しました。だから実際は、このままを原作と考えても、さしつかえがないと思っております。

最後に、解説として、その作家の一生や、その作品の説明がつけられております。一つの作品をよく味わうには、それがどのような作家によつて書かれたか、その作家の一生、ひととなりを知ることが、きわめてたいせつであります。それで初めに、解説のほうを読んでから作品のほうを読むことも、作品をよく理解することができる方法でしょう。

この解説も、それを書いた人々が、たいへん興味ふかく、親切にしるしくれておりますので、きっと、作品を読むように、みなさんの心をひきつけてくれるであります。

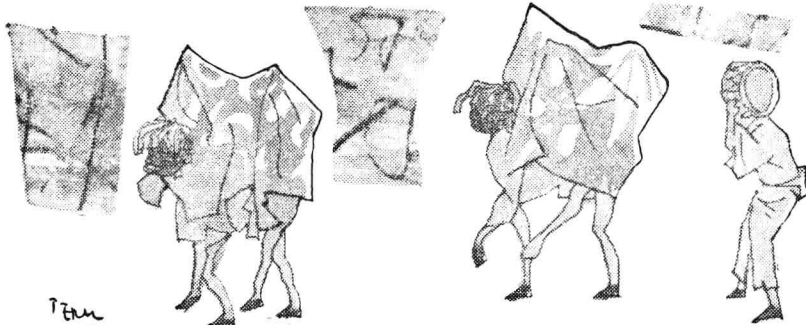
編集者 久松 潜 一

伊藤 整
福田 清 人

★ 本文中、唐（むかしの中国の名）のように、かっこの中に小活字で入れてあるのは、編集部でつけた註です。

正岡子規集もくじ

蝶 ちよう (抄)	七
赤 あか ・	九
飯待 めし つ間 ま	三
根岸草蘆 ねぎしせうろ 記事 きじ (抄)	二四
熊手 くまて と提灯 ちようちん	六
新年 しんねん 雑記 ざつき	二
ランプの影 かげ	二四
墨汁一滴 ぼくじゆいつてき (抄)	七
初 はつ 夢 ゆめ	三
くだもの(抄)	八
病牀六尺 びようしやうろくしやく (抄)	四一
子規俳句集 しきはいくしゆ	五
子規短歌集 しきたんかしゆう	二四
解説 井本農一	一三



高濱虚子集もくじ

斑鳩物語 ふぐろものがたり ・・・・・・・・・・・・・・・・・・	一四二
俳諧師 （抄） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・	一五四
柿二つ （抄） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・	一六二
第一回 柿二つ・第十回 又柿の頃・第二十回 死	
自句 （抄） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・	一八七
虚子俳句集 （しゅう） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・	二〇六
解説 福田清人・・・・・・・・・・・・・・・・・・	三

そうてい 青山龍水
カッ ト 山本耀也



正^{ただ}

岡^{おか}

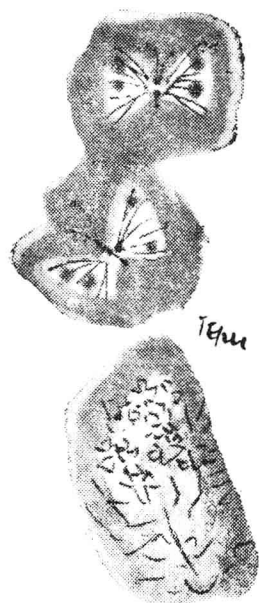
子^し

規^き

集^{しゅう}

空はうららかに風はあたたかで、きょうは天上に神様たちの舞踏会のあるという日の昼過ぎ、白いち、うと黄なち、うとの二つが余念なく野べにかくれんぼをして遊んでいる。こんどは白いち、うのかくれる番で、白いち、うはひやくしよう家のうらのうの花がきねにほしてある白布の上にちよいと、とまって静まっていると、黄なち、うはそこらのすみずみをさがして、つるべの中や

蝶ちよう
(抄)



井戸の中を見たがどこにもおらんのでやや失望した様子であった。たちまち思いついたかしてかなたの垣のすみへ行て、あおいの花を上から下へいちいちにのぞいてもやはりここにもおらんのでしかたなしにもとの井戸ばたに帰ろうとして、ふと干し布の上の白いち、うを見つけた。「オヤいやだよ、こんなところにいたのだよ」ト変な調子でいうたので、白いち、うは思わずわらいだした。

「ほんとにおかしいよ、お日様の照るところにいるのがきいちちゃんには見えないのだよ。さア、早くおかくれよ。すぐに見つけてあげるから」ト白いち、うはいうたので、黄なち、うもわらいながら、あちらの木立をさして飛んで行つた。しばらくして白いち、うは後を追うて産土神の鳥居まで来て、あたりを見回していると向こうの木の中に、ちらりと物がかげが見えたようであった。「きつとあのえのきのうろの中へかくれたんだよ」トひとりつぶやきながら、えのきのかげまで来ると、羽音を静めて、あべこべにおどかしてやろうと思つて、うろへはいるやいなや、大きな声で、「とー」トいうた。すると、かみなりのような声で、「だれだよ、だしぬけに大

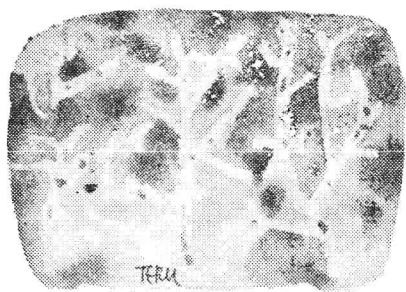
きな声をしやアがるのは「トいうのを見ると目にあまる
 ような山女郎やまじやうらうであつた。白いち、ようはきもをつぶしてま
 つさおになってあとも見ずににげ出したが、空を飛んで
 は追いつかれると思うて、なるたけとげの多い草むらの
 間をくぐりくぐりにげた。黄なち、ようはあざみの葉裏に
 かくれていたが、白いち、ようの事ありげにあわてて飛ん
 で行くのを見て、あとから追いかけた。「オーイオーイ」
 というてよぶといよいよあわててにげるようなので、あ
 たいだよあたいだよ」トつづけさまによんだら、ようよ
 う聞えたかあとふり向いて息をはずませている。「どう
 したのだよ」トいうと、「なに山女郎やまじやうらうが追っかけると思
 うて」ト前のいちぶしじゅうを話した。「それではあの
 ばけものえのきなの。あんなところへあたいがかくれて
 いると思うたの。ばけものえのきと聞いたばかりでも身
 の毛がよだつじやないか」ト黄なち、ようはねをふるわ
 していうた。「だけれど、もしあんなところへかくれて
 いておどかすつもりかもしれないと思うて」ト、少し落
 ちついた様子だ。ややしばし二つで何事か相談していた
 がついにつれだちて野中にあるなにがし様のお下屋敷しもやしきの

へいの内へ飛んではいった。お下屋敷しもやしきのぼたん畑にはお
 くれぎきのぼたんがところどころに植えてある。むこう
 のほうには舶来はくわいの草花らしいのが毒々しい色にさいて、
 はち植えのままいくつもかたよせられている。ことしは
 ひイ様のご病気で、ぼたんのさかりにもこちらへおいで
 がないので、園は少しあれたまま手入れせずにある。る
 すいの人ひとりと門番のじいさん夫婦としかおらんので
 お屋敷やしきの内はしんと静まつて、まるであき家のようだ。
 二つのち、ようはここへ来ると案内知り顔にあちらの花こ
 ちらの花とうれしそうにうかれていたが、やがて二つは
 いっしょに、くれないの大輪のぼたんのしべに、はねを
 かわしてとまった。「くたびれてねむくなつた」ト白
 いち、ようはわずかにはねを動かしながらいうた声はねむそ
 うであつた。「もう寝るの」ト黄なち、ようもはやねむり
 かけている。夕日のかげはななめに権現けんげんの森をかすめて
 遠くに聞ゆる入相いりあひの鐘かねはあくびするようにひびいてくる。
 ぼたんの花びらは少しずつ少しずつぼまつてとうとう
 二つのち、ようを包んでしもうた。遠くも近くもかすみな
 がらに暮くれて、かずきかけたような月がぼんやりと上っ

たとき、空はるかにゆかいそうな音楽が聞えた。ちょうど今は六番めの舞踏で、美の神が胡蝶の舞をはじめたところであった。

(明治三十二年六月)

赤



余は子供のときから自然界の現象がひどく好きであった。何も人間をまったくきろうたわけではないけれども人間には気に食わぬ人間が多いから、それよりは自然界の

美麗な柔順で少しも我意にさ

からわなんだのが気にいった

のであろう。そうでなくても

美麗な自然界を、そうしてす

きな目から見ると、美麗とも

なんともいいようのないほど

美しい。ようやく年とって一

人前の男になるころ、だれで

も俗世間にむかって求むると

ころがあるのだが、余は俗世

間に向かつて求めたところがおのれの情欲を満たすことができないから、やはり天然界に向かつて求めようとする。こちらから情をもつて向かうと、今までは無心のようであつた天然界がにわか活動しはじめて、すべての物が情をもつて周囲から余に話しかける、すなわちすべての物にたましいがあつて、それがみな自分ひとりに向かつて来る、すなわち余が中心に立つていて周囲を支配しているように思う。しかしいよいよこの天然界に近づいて来るほどまだ物足らぬところがある。それはこの無数の小精霊のみでなく、ほかに大精霊がどこかに存してゐなくてはならぬと感じる。大精霊といつても宗教でいう上帝みたいな絶対的な者ではない。むしろその精霊は余を待つて存し余はその精霊を待つて存するというような性質の者である。こういう精霊が潜伏している天然界の美しく見えるのは言うまでもないが、その美しい現象の最要素は色である。色は百種も千種もあるけれど、がいて天然界の色はつややかにうつくしく、人間界の色はくすんでくもっている。空の青、葉の緑、花の紅白紫黄の明かるくゆかいなるに反して、人間の製造した衣服、

住居、器具などはみな暗く寒い色であつて、なんだか罪惡を包蔵しているように思われる。しかし天然の色でもその中最も必要なのは赤である。赤色のない天然の色ではいかに美しくても活動することがない。山深く林しげった所では気が静まるばかりであるが、そこに赤い鳥居が一つあると気が動いて来る。鳥居は人間が製造したものであるけれど、人のおらぬところにある赤い宮や赤い寺は人間よりも天然に近い。こういう辺には人間以上の者がいるような感じがするのである。または荒野に出て見ても麦のへりにたんぽぽがさいているだけではそれほどにないが、げんげんの四五本もあると、もうたまらなくなる。そこら一面にげんげんの花がむしろのようになっていると、その上へ寝てしまいたいと思う。そこへ寝ていれば精霊はしずかにわがまくらべにおりて来るのであるが、そのあたりがちよつとでも人間のかけが見えるると精霊はすぐに去ってしまう。精霊は人間がだいきらいなのである。けれど人間のかげのさきぬところというものはわれわれの行きうところにはまずない。そこで余は一つの理想的の家屋建築したいと思うている。その家屋

の装飾は人間的のくすんだ色でなく、天然的是でな色を用いたい。たとえば談話室はかべもてんじょうも窓かけもテーブルかけもみなまっ白な色を用いて、テーブルの上に赤のぼたんを三輪いけておく、書齋はかべもてんじょうも紙も本の表紙もことごとくき赤を用いて自分は白い着物きてその中にすわっている。それから寢室は四方上下みな野外の緑をえがいた絵にしてしまう。その野の一方には奥深い森があつて、赤い鳥居と赤い堂とを見こむようになつてゐる。この中へはいつて横にたおれてゐると、いつか野外に草をまくらとして寝てゐるような心持になる。ようようねむけをもよおしてうつらうつらとなるとき、かんばしい風がふいて来たと思つて見るとひとりの女神が、赤のうす色のうすものを着て立つてゐる。女神の手は余の手にふれたと思つと、なんだか心がぼーッとなつて自分のからだやら人のからだやらわからなくなる。それから女神が空の上のほうでまねくとみると、自分の靈魂は自分のからだをはなれた。そしてだんだんに上つて行けば行くほど、人間界が下のほうに小さく見えている。やがてまた下のほうで女神がまねくか

らだんだんにおりて来てもとのからだにはいると、たちまち目がさめた。女神はかげも形もなかった。てんじょうの雲にかくれたのか、お宮の中へはいつてしもうたのかそれはわからぬ。この女神が赤の精霊である。

(明治三十二年六月)

飯待の間

余はむかしから朝飯を食わぬことにきめているゆえ病人ながらも腹がへって昼飯を待ちかねるのは毎日のことである。きょうははや午砲が鳴ったのにまだ飯ができぬ。まくらもとには本もすずりも何も出ておらぬ。新聞の一枚も残っておらぬ。しかたがないからふとんにほおづえついたらまばんやりとして庭をながめている。

おとといの野分のなごりか空はくもっている。十本ばかりならんだけ、いとうは風の害を受けたけれど今は起き直ってまっかな頭をそろえている。一本の雁来紅は美しき葉を出して白い干し衣にうつっている。大毛蓼というものかばかにたけが高くなつてうす赤花は雁来紅の上にかぶさっている。

さっきこの庭へ三人の子供が来て一びきの子ねこを追



いまわしてつかまえて行つたが、かれらはまだそのねこを持って遊んでいると見えて垣の外にさわぐ声が聞える。竹か何かでねこを打つのであるかね、こはニャーニャーと、細い悲しい声で鳴く。すると高ちゃんという子の声で、一年ちゃんそんなにぶつとばけるよばけるよ」とやや氣づかわしげにいう。ことし五つになる年ちゃんという子は三人の中のいちばん年下であるが「なにばけるものか」と平氣にいつてまたつよく打てばね、こはニャーニャーといよいよ窮した声である。三人でしばらく何か言っていたが、やがて年ちゃんという子の声で、「高ちゃん高ちゃんそんなにぶつとばけるよ」と心配そうに言った。こんどは六つになる高ちゃんという子が打っているの見える。ややあつてみなみなわらつた。年ちゃんという子がねこをだきあげた様子で一ね、こは、ね

こは、ねこはよろしゅうござい」と大きな声でよびかけながらあちらへ行つてしまった。

飯はまだできぬ。

小さい黄なち、ようはひらひらと飛んで来て干し衣のすそを回つたがすぐまた飛んで行つて遠くにあるおしろいの花をちよつとすうてついに、ぎのうしろにかくれた。

かこのうずらもまだ昼飯をもらわないのでひもじいしてみえてしきりにがさがさとかごをかいている。

台所ではさらとくりなどの物にふれる音がさかんにしている。

見る物がなくて空を見ると、黒雲と白雲と一面に丑寅(北東)のほうへずんずんと動いて行く。しだいに黒雲が少なくなつて白雲がふえて行く。少しは青い空の見えるくるものうれしかった。

例の三人の子供はまたわが垣の外まで帰つて来た。こんどはごみため箱の中へねこを入れて苦しめて喜んでゐる様子だ。やがて向かいの家の細君すなわち高ちゃんという子のおッかさんが出て来て「高ちゃん、ねこをいじめるものじゃありません、いじめると夜ばけて出ますよ、

早くにがしておやりなさい」としかつた。すると高ちゃんという子は少し泣き声になつて「ねこをつかまえて来たのはあたいたいじゃない年ちゃんだよ」といいわけしている。年ちゃんという子もまが悪うてだまつているかしばらく静かになつた。

カッとたたみの上に日がさした。飯が来た。

(明治三十二年十月)

根岸草蘆記事（抄）



一、去年の暮れ、虚子が生ける小が、一わを贈つてくれたので、たらいに入れて飼うていた。夜はえんがわにたらいをすえて雨戸をしめておく。我はしょうじのうちにて何か書いていると、かもはたらいの中に置いてある石の上へ上がつてときどきはばたきをする様子で、それからしばらくするとえんがわへ飛び出してコツコツと

あるいている様子で、ついにはランプのもつとも明かるくうつつているしょうじへガサとかきつこうとする様子である。それ

がうるさいのでこころみにたらいともにしょうじのうちへ入れてわがつくえの向こうへ置いてやると少しもさわがないで静かに三尺の池についている。物書きながらあまり静かだからもう寝ているのだろうと思うてかもを見ると、なかなか寝ていないのでまるき小さき目をランプに光らせている。さなくとも早寝がちの根岸、冬の夜の十二時過ぎては死んだような静かさで笹一枚動く音もせぬ。そのしんとした中にわれとかもとが起きていると思うとさびしいような寒いような心持がして、いつまでもかもとはなれたくなかった。しかしながらたらいの中では長く生きていまいという心配と、となりの主人の懇望とで、ことしの元日にとなりの池へ放してやった。我も人の背に負われて、となりまで行つてかものはばたきにくたびとなくしてはついに石の上で安らかにねむっていたのを見とどけて帰った。その後、となりではめすがもを買うて来ていっしょにならそうとしたがそのめすがもは少しも人なれないので、ふせ（着物をかけるカゴ）をかけて飼うているうちに死んでしまったという話であった。六つばかりになるとなりの女の子が遊びに来るたびに「か